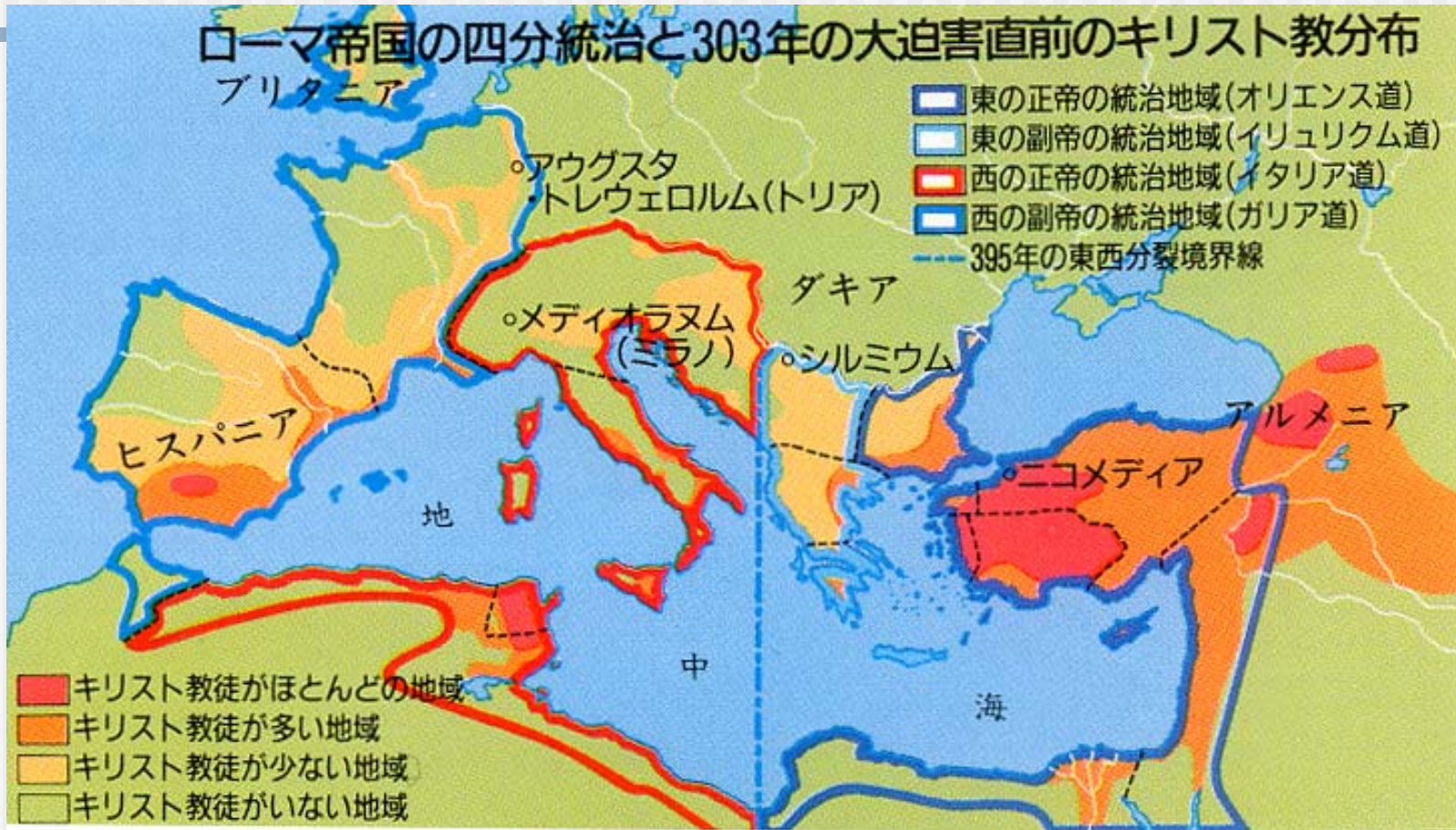


ポスト・ローマ期ヨーロッパ のコミュニケーション問題

—ラテン語はいつから話されなくなったか—

4世紀のローマ帝国



東西4000キロ

南北2000キロ

帝国の言語

- ローマ帝国の使用言語は「ローマ人の言葉lingua romana」と呼ばれたラテン語.
- 文章をつづる書き言葉, 話言葉もおなじ.
- 会話のさいの発音は地方により違いがあった.
- もっとも大きな違いは教育による, 階層間の
の
差異.

ラテン語教育

- 帝国の領土拡張に応じて、いち早くラテン語教育のための学校が整備された。
- 文法教師は各地の学校で上層の子弟の教育にあたる。
- ブリテン島北西の僻地で生まれた聖パトリックや北アフリカに生まれた聖アウグスティヌスたちは、どちらも地元の学校で教育を受けた。
- ラテン語教育はローマ人の文化的アイデンティティを涵養する役割をになった。

教育の実像

- 8歳から7、8年間文法教師のもとで学ぶ。
- かぎられた少数のテキストを徹底して勉強。
- 作品はウェルギリウス, キケロ, サルスティウス, テレンティウス
- この課程を終えると修辞学教師が, レトリックと弁論術を教える。

教育の姿

- 手本となる作家たちの一行一行が読み上げられ、表現が研究される。
- 練習問題はそうした大作家の文体模倣。

Ex. 「戦車競走の情景をウェルギリウス風の文体で綴りなさい」。

- 文章だけでなく、テキストの思想を教えこむ
- 話法（直説法, 接続法, 命令法, 不定法）, 時制（現在, 未来, 未来完了, 未完了過去, 完了過去, 過去完了）, 相（能動, 受動）, 名詞, 形容詞, 代名詞などの転尾などをきちんと使いこなせなければ, 自分の意志を正確に伝達できないし, 事物や事態の有様や関係を正しく表現できない。文法学習は形式論理学の訓練でもあった。

判断の智慧

データベース

- ローマのエリート層はテキストから学んだ智慧を、行動倫理や人間の判断の基準にした。
- このような教育を受けていない人間には真の意味での誇り、寛容さ、愛などの徳目や真の憎しみ、真の愛、真の賞讃などの感情は生まれない、という思想。
- 正式なラテン語教育を受けた上層の人々が話すラテン語が都会風話法（ウルバニタース urbanitas）

田野風話法（セールモ・ルース ティクス sermo rusticus）

- 社会の多数派は学校教育も正式なラテン語教育も受けなかった人々.
- かれらが話すラテン語は古典文法から外れ、簡略化され、独特の口語的表現に富んでいる. **ただし発音原則はおなじ.** これを都会風話法に対して、田野風話法（セールモ・ルースティクス）と呼んだ.

キリスト教の影響-謙虚話法（セールモ・フミリスsermo humilis）

- 台頭しつつあった教会は、テルトゥリアヌス、ヨハネス・クリソストモス、アンブロシウス、アウグスティヌスなどの第一級の知識人を担い手とした。
- かれらが習得したのは都会風話法だったが、庶民への接近のために、採用したのが弁論術で「謙讓話法 submissum」と称された、簡明でへりくだった謙虚な表現法。
- 話し言葉としてのラテン語の変化に関して、4世紀に始まるセールモ・フミリスの普及は重要。

ダイグロシア (diglossia)

- ダイグロシアとは二つの言語あるいは方言とか変 (language variety) が同時に社会に存在している状態をさす。社会言語学の用語。
- ベルギーの中世史家マルク・ヴァン・ウイトファンゲは、ダイグロシアの概念をさらに練り上げる意図で次のように主張している。
「ダイグロシアは二つの異なる言語の存在を示す言葉ではない。それは語彙、形態、統辞などの面で違いがあり、**発音面**ではあまり原理的な差異がない同一言語の二つの変種、あるいは二つの記録形態である。一つは日常的会話言語であり、もう一つは規範化された“高等言語”である。おなじ言語のこの二つの形態は、その間に多様な変種が数多くあるものの、それ独自の機能をもち、相互の理解の面では、「低い変種」である日常会話形式を自己の言語とする者でも、「高等言語」を受動的に理解でき、その点においては両者のコミュニケーションは支障なく成り立つのである」

ラテン語の諸バージョン関連図式

書き言葉ラテン語



ウルバニタース

話し言葉ラテン語



ウルバニタース



セールモ・フミリス

セールモ・ルースティクス



ダイグロシア

話し言葉としてのラテン語終焉期 についての3つの説(1)

■ 西暦500年以前説

19世紀後半のドイツの文献学者たちが多い。
F・ディーツ, W・マイヤー＝リュプケ

- ◆ F・ロト「ラテン語はガリアでどの時期に話されなくなったか？」(1931)

5世紀の社会状況についての否定的見方が大きく影響した。ラテン語で書かれた作品の水準の低さ, 崩れた言葉使いなどを挙げ, ロマンズ語の始まりと見た

話し言葉としてのラテン語終焉期 についての3つの説(2)

■ 西暦700年以後説

アメリカ学派が先導役. 8世紀頃までラテン語が話されていたとする.

M・リヒター, G・サンダーズ, R・ライト

話し言葉としてのラテン語終焉期 についての3つの説(3)

- 西暦600年以後説

- ダグ・ノルベルグなどが提唱.

庶民の話し言葉は600年頃はラテン語. 800年以後は決定的にロマンス語であったと考える. この間にラテン語からロマンス語への転換があった.

- ◆ E・レフステットなどが支持

この問題の現在の定説.

- ◆ **なぜこの時期に？**

カロリング・ルネサンスの余波

- シャルルマーニュの宮廷文化の繁栄. 古典主義への回帰.
- イングランド出身の文化顧問アルクインの絶大な影響力.
- カロリーナ小文字の導入, 句読点法の一般化, **正書法の徹底**.

アルクインの『正書法論 De orthographia』

- 「神の法の表明や、教父の聖なる言葉を筆写する者は来たりて、ここに座るがよい。かれらの手が無用な言葉を挿入したり、愚かな誤りをおかさぬよう躡けるべし。かれらをして校訂の行き届いたテキストをつくりだそうという決意... かれらが句読点を用いて、ただし意味を伝え、読み手が教会で敬虔なる兄弟の面前で読唱するおりに、いかなる誤りもおかさず、また突然の絶句に陥ることの無きようになさしめよ」。
- 正確な読解のためには全ての文字を正しく発音しなければならない。i と e, b と v の混同などはすべて話し言葉のラテン語にひきずられた結果である。

上, 6 ~ 7 世紀公會議議事錄, 下, 9 世紀所領明細帳

misericorditer. ut dicitur in quibus
 vobis fieri non vultis emendam
 iubeatis. quatenus nec per cal
 ledā praesumptionē quis caudeat
 in postmodum per tumorem super
 biae similia perpetrare. et si in
 ta se ecclesiae vestro studio et or
 dinatione iam xpo propitio con
 quiescat.

Habet in uillamite
 mans indomnicatu
 cum casa & alus castrens
 sufficienter. habet ibi
 culturas inter maiores &
 minores inter totas tres
 decimas. xxi. habentes
 bun. cccc xlvi. quae poss
 seminari de mod. frumenta
 i. d. Deanea useri arp.
 Lxvii. deno uella uinea
 quam dominus irmino plan
 taunt. arp. xvii. ex quib;
 possunt colligi de uino mod
 cl. de pte arp. lxxvi.
 ex quib; colliguntur defen
 carra. c. habet ibi de silua

sold. xvi. porcos crassos
 xij. pastas xxxvi. oua
 dc. unus quisq; donat
 dnr. ij. cum porcis crassis
 quos donant. Et ipsi
 qui in uillamite praeui
 dent ipsos farinarios
 si poterint in ipsa aqua
 prendere anuillas
 soluunt inde unus quisq;
 c. quae fiunt simul deccc.
 si uero eas accipere nequi
 uerint nihil inde soluant

Sunt uero ibi quattuor
 farinarii quos dominus
 irmino fecit qui adhuc
 nondum sunt censiti.

古典主義の規範への復帰＝ ダイグロシアの消滅

- 古典的規範に忠実に発音されたラテン語は、識字世界への希薄な関わりしかもたない人々には理解不能となる。
- 書き言葉としてのラテン語から切り離された話し言葉は、決定的にロマンス語への道を歩む。